

英語の移動構文における着点志向性

森下 裕三

環太平洋大学

y.morishita@ipu-japan.ac.jp

1. はじめに

本研究では、英語の自動詞移動構文 (the Intransitive Motion Construction: **IMC**) と使役移動構文 (the Coused-Motion Construction: **CMC**) における着点志向性について議論する。具体的には、以下の (1) および (2) に示したような用例を指す。

(1) The fly **buzzed** into the room.

(2) Pat **sneezed** the napkin off the table

(Goldberg 1995: 3)

着点志向性は、Ikegami (1987) によって提唱された言語に見られる特徴のひとつとされる性質である。この性質については、これまでに多くの研究者によって、さまざまな実証的なデータが示されている (Stefanowitsch and Rohde 2005, Papafragou 2010)。

本研究では、British National Corpus (BNC) を利用して、上記の2種類の移動構文における着点志向性を数量的・統計的に比較する。その際、Goldberg (1995: 78-79) によって主張されているIMCとCMCに見られる継承関係に注目した議論をおこなう (cf. 谷口 1998)。

本稿の構成は次の通りである。2節では、移動表現に見られる着点志向性、そして、IMCとCMCの関係についての議論を概観し、どのような課題が残されているのかを確認する。さらに、3節では、2節で確認した課題を解決するために必要となるデータの収集方法、およびデータを分析した結果を示す。4節では、3節で得られた結果から、どのように理論的示唆が与えられるのかについて議論する。最後に、5節で全体の議論を振り返り、本研究の結果から得られる理論的示唆についても述べる。

2. 先行研究と残された課題

2.1 移動表現における着点志向性

既に述べたように、言語には着点志向性があると言われている (Ikegami 1987)。着点志向性という性質そのものが多くの研究者によって議論されているが、本研究では、どの程度まで着点をあらかず経路表現が移動表現において生じやすいか、という点から議論を進める。

よく知られているように、英語の移動表現では、不変化詞や前置詞によって移動の経路があらわされる場合であっても、必ずしも起点から着点まですべての経路が明示されるわけではない。

(3) a. [...] two large tears **rolled** down her cheeks
[...]. [BNC-BMU]

b. [...] one of the undercarriage wheels
bounced through a house [...].

[BNC-CLU]

(4) a. [...] a nail bomb **was dropped** from a bridge
onto their tour bus. [BNC-K3K]

b. [...] then he **slid** it [= a ring] into his hip
pocket. [BNC-JY9]

(3a)-(3b) に挙げている用例は IMC の具体例で、(4a)-(4b) に挙げている用例は CMC の具体例である。たとえば、(3a) に挙げている用例では、*down her cheeks* という前置詞句によって移動経路の一部が言語化されているだけである。(4a) の例でさえ、*from the bridge onto their tour bus* という連続した前置詞句によって起点と着点のみが言語化されているだけで、通過点については特に言及されていない。

そこで、Stefanowitsch and Rohde (2005) は、さまざまな移動動詞を含む用例をコーパスから抽出し、着点志向性がどの程度まで普遍的に見られる性質なのかを実証的に示した。彼らのデータに

よると, *escape* など一部の語については, 着点よりも起点をあらわす表現の方が多くみられたものの, 英語の移動動詞は概ね着点志向性が確認されていた。

しかし, Stefanowitsch and Rohde による研究にも課題は残されている。彼らの研究では, 自律的な移動をあらわす表現のみが考察の対象とされており, 使役移動構文のように使役者が関与する表現については議論されていない (Stefanowitsch and Rohde 2005: 265)。Rohde (2001: 169) は, コーパスを利用した実証的研究によって, 使役移動動詞として使われている *move* では 66.8% の用例で着点をあらわす表現との共起が見られるのに対して, 自律的な移動動詞として使われている *move* では 42% の用例において着点をあらわす表現との共起が見られると述べられている (see Goldberg 1995: 174, Stefanowitsch 2001: 296)。

本研究において実証的な立場から議論しようとしている自動詞移動構文と使役移動構文における着点志向性は, この残された課題の解決する糸口を見つけるためである。

2.2 構文文法における継承関係

Lakoff (1987) や Goldberg (1995) らによって発展してきた構文文法は, 形式と意味のペアから成る構文という単位を中心にした理論である。既に多くの研究者によって, さまざまな現象が構文文法の枠組みから議論されている。本節では, 本研究と関連のある部分にかかわる先行研究に限定して紹介していく。

構文文法では, 各構文はさまざまな継承関係によって繋がりを持つと考えられている。つまり, 各構文は互いに独立して存在しているわけではない。たとえば, 本研究で扱う IMC は, CMC の真部分であると考えられている (Goldberg 1995: 78-89)。IMC と CMC の関係については, 尾谷 (2011: 86-88) によって, 以下のように必ずしも同じ動詞が使われているわけではないことから, 常に成り立つわけではないと批判されている。

- (5) a. The fly **buzzed** into the room.
b. John **let** the fly into the room.
(尾谷 2011: 86)

しかし, Goldberg (1995: 78) も示しているよう

に, IMC において主語として具現化する項は *theme* である。つまり, (5a) のような非能格自動詞が生起する用例は, 実は IMC の用例ではないと考えることも可能である。実際に, 谷口 (1998: 234) は, IMC と CMC における継承関係と同じことが, 非対格自動詞と同形の他動詞との関係にも見出せると主張している。

そして, IMC と CMC との継承関係が成立するのが, 非対格自動詞および同形の他動詞の時のみだとすると, 以下のような例こそが Goldberg の主張を支持する用例だということになる。

- (6) a. The ball **rolled** into the gutter.
b. John **rolled** the ball into the gutter.
(尾谷 2011: 86)

2.3 先行研究の残された課題

既に 2.1 節でも述べたように, IMC と CMC の両構文について着点志向性が見られるのかどうか, そして両構文で着点志向性に違いが見られるのであれば, その理由を明らかにする必要がある。しかし, 非対格自動詞が生起する IMC と同形の他動詞が生起する CMC においては, 一方の構文が他方の真部分であることすると, 着点志向性に大きな差は見られないということが予測できる。そして, この予測は既に示した Rohde (2001: 169) が示したデータと矛盾する可能性がある。ただし, *move* は自律的な移動をあらわす用例においても非能格自動詞としての用例が一般的である。では, 本当に真部分の関係にある IMC ではどうなのかを次節以降で議論する。

3. データの収集と分析結果

本節では, 前節までの議論を踏まえて, BNC から必要なデータを抽出し, データの分析結果を示す。2 節でも述べたように, 本節では非対格自動詞と同形の他動詞が生起する IMC および CMC の用例のデータが必要となる。そもそも移動をあらわす非対格自動詞と同形の他動詞はあまり多くないが, 本研究では Levin (1993: 51.3.1) による以下の動詞を対象とした。

- (7) *bounce, drift, drop, float, glide, move, roll, slide, swing*

しかし、実際にはこれらの動詞を含む用例のすべてが本研究で利用可能なデータだというわけではない。なぜなら *drift*, *glide*, そして *float* は、CMC に生起する用例が極端に少なく、*move* は非能格自動詞としての用例が多く、*swing* は用例が極端に少ないため除外せざるを得なかった。そこで、本研究では残りの各動詞について、100 例ずつ物理的な移動をあらわす用例のみをランダムに抽出し、目視によって物理的な移動を表す用例のみを抽出した。

物理的な移動をあらわさない用例も多かった

ため、以下に示すような例は目視によって取り除いた。

- (8) a. She dropped her eyes to the mug [...]
[BNC-HA9]
b. Her name rolled off his tongue [...].
[BNC-HA5]

以上の点を踏まえて収集したデータを整理したものが以下の表 1 である。

表 1: 各動詞の IMC と CMC における項の分布

VERB		THEME		PATH			
		ANIMATE	INANIMATE	SOURCE	VIA	GOAL	DIRECTION
<i>bounce</i>	IMC	36 (42.4%)	49 (57.6%)	41 (48.2%)	9 (10.6%)	15 (17.6%)	20 (23.5%)
	CMC	9 (60.0%)	6 (40.0%)	3 (20.0%)	1 (6.7%)	7 (46.7%)	4 (26.7%)
<i>drop</i>	IMC	24 (57.1%)	18 (42.9%)	12 (28.6%)	1 (2.4%)	20 (47.6%)	9 (21.4%)
	CMC	7 (12.1%)	51 (87.9%)	11 (19.0%)	3 (5.2%)	43 (74.1%)	1 (1.7%)
<i>roll</i>	IMC	32 (35.6%)	58 (64.4%)	22 (24.4%)	14 (15.5%)	20 (22.2%)	34 (37.8%)
	CMC	2 (10.0%)	8 (80.0%)	1 (10.0%)	0 (0%)	5 (50.0%)	4 (40.0%)
<i>slide</i>	IMC	36 (64.3%)	20 (35.7%)	21 (37.5%)	3 (5.4%)	20 (35.7%)	12 (21.4%)
	CMC	21 (37.5%)	3 (5.4%)	7 (15.9%)	6 (13.6%)	22 (50.0%)	8 (18.2%)

4. 考察

表 1 の結果を見る限り、全体的に IMC と CMC を比較すると、CMC の方がより着点志向性が高い一方で、IMC では、むしろ起点をあらわす表現が共起しやすいことが分かる。実際に、全体のデータは χ^2 検定によって統計的に有意な差が確認できた ($df=1, p<.01, \phi=0.33$)。

4.1 移動表現で着点志向性が見られる理由

もちろん、*drop* のように IMC でも CMC でも着点志向性を見せる動詞もあるが、ここでは、CMC において確認できる着点志向性が、なぜ IMC では確認できないのかという点について議論する。まず、移動表現において着点志向が見られる理由として Verspoor et al. (1999: 98) が挙げている説明を確認したい。彼らは、移動事象において着点志向性が見られる理由を心理学的な理由によって説明している。つまり、我々は基本的に目的や着点というものに注意が向いてしまう

性質を持っているということである。たしかに、本研究のデータでも CMC では全体的に着点志向性が確認できた。

4.2 着点志向性が IMC で確認できない理由

では、対応する非対格自動詞が使われており、CMC の真部分であるはずの IMC では、全体的に着点志向性が見られなかったのはどうしてだろうか。これは、本研究で調査した IMC に非対格自動詞が生起していることが関与している。非能格自動詞とは違い、主語として具現化する項が意志を持たないというのが非対格自動詞の特徴であり、この意志の欠如こそが、IMC において着点志向性が見られない理由だと考えられる。言い換えれば、自律的な移動による移動表現において着点志向性が確認できたのは、動詞が基本的に非能格自動詞であることと関係する。

CMC では、主語として生起する項において意図が関与するため、やはり着点を表しやすい傾向

が見られる。実際に、受動態として使役主が背景化した場合は、以下の例のように着点が表示されない場合が多く見られた。

- (9) a. Fresh barrels of ale and wine **were rolled**
from the cellars. [BNC-APW]
b. [...] she'd **been dropped** from a great height.
[BNC-JXT]

さらに、CMC において起点をあらわす表現があまり見られないのには機能的な理由があると考えられる。つまり、CMC では (10) の例にあるように、使役主こそが起点であることが多いため、さらに起点を言語化する必要がないのである。

- (10) a. [...] he **slide** it [=a ring] into his hip pocket.
[BNC-A79]
b. So the poor discarded animals **are bounced**
down the road [...]. [BNC-HH0]

5. まとめと理論的示唆

本研究では、着点志向性および IMC と CMC の関係性という点からコーパスの用例数を基に議論した。非対格自動詞と対応する他動詞のペアとなる 4 種類の移動動詞をランダムに抽出し、分析したところ、CMC で見られた着点志向性が、IMC ではあまり見られなかった。構文文法および谷口 (1998) による理論的な予測からは、IMC でも同様に着点志向性が見られると考えたが、実際には予想とは異なる結果になった。

この結果から、次のような理論的示唆を得ることができる。i) IMC が CMC の真部分だと考えることはできるかもしれないが、よりミクロな視点から見ると、かなり性質の異なる構文である可能性がある。ii) 同じような動きをあらわす動詞であっても、生起する構文が異なれば着点志向性も異なる可能性がある。

参考文献

- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A construction Grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
Ikegami, Yoshihiko (1987) 'Source' vs. 'goal': A case of linguistic dissymmetry. In René Dirven and

Günter Radden (eds.), *Concepts of Case*, 122-146. Tübingen: Narr.

Lakoff, George (1987) *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago/London: University of Chicago Press.

Levin, Beth (1993) *English verb classes and alternations: A preliminary investigation*. Chicago: University of Chicago Press.

尾谷昌則 (2011) 「認知言語学と構文文法」尾谷昌則・二枝美津子 (編) 『構文ネットワークと文法』 33-111. 東京：研究社.

Papafragou, Anna (2010) Source-goal asymmetries in motion representation: Implications for language production and comprehension. *Cognitive Science* 34, 1064-1092.

Rohde, Ada (2001) *Analyzing path: The interplay of verbs, prepositions and constructional semantics*. Ph.D. dissertation, Rice University, Huston, TX.

Stefanowitsch, Anatol (2001) *Constructing causation: A construction grammar account of analytic causatives*. Ph.D. dissertation, Rice University, Huston, TX.

--- and Ada Rohde (2005) The goal bias in the encoding of motion events. In Günter Radden and Klaus-Uwe Panther (eds.) *Studies in linguistic motivation*. Berlin: Mouton de Gruyter.

谷口一美 (1998) 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』 東京：ひつじ書房.

Verspoor, Marjolin, René Dirven and Günter Radden (1999) Putting concepts together: Syntax. In René Dirven and Marjolin Verspoor (eds.) *Cognitive exploration of language and linguistics*. 87-115. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.